

意見交換の概要 (平成 29 年 8 月 4 日(金)・南予地方局)

1. 宇和島や愛媛の伝統的な文化・食文化の保護及び普及について

愛媛を活性化するためには、先ほど知事も言われていたが、県内外へのアピールが大切だと思う。本校では県外へ向けたアピールとして、フィッシュガールなどがあり、全国各地で解体ショーをすることで、愛媛県や愛育フィッシュや宇和島に興味を持ってもらうことができていると思っている。また、県外へのアピールだけでなく、地元を活性化するための取組みも行っており、本校の食品工場へ小学生や地域の方々を、一番最近では、ハワイの小学生を招いて、じゃこ天づくりやタイを使った板づくりをしたり、市内の保育園に出向いて、魚を好きになってもらう魚食教育をしたりしている。これらの活動は、地元宇和島や愛媛の特産品、郷土料理などを小さい子どもたち、ないしは他国の人知って興味を持ってもらったり、愛媛県は水産物の生産が盛んであると知ってもらうきっかけになればと思っている。宇和島や愛媛の伝統的な文化や食文化を普及させることも、愛媛県を盛り上げる手段なのではないかと考えている。そこで、どのように伝統的な文化を保護したり普及させたりすればいいか意見をお聞きしたい。

【知事】

大変難しい質問なんですけど、妙案というのは、これやれば確実じゃないんで、常に考えながらやる必要があると思うんだけど、例えば、食べ物でいうと、人々の食の好みっていうのは、移り変わっていくもんだと思うんですよ。いい例が肉、牛肉。昔はね、10年前の調査を見ると、どんな牛肉が好きですかってアンケート取った場合、さしの多い、脂の多い肉がいいですっていうのが圧倒的に1位だった。でも、今ね、同じアンケート取ると、脂の乗ってる、さしの多い霜降り肉っていうやつね、これ全然下になっちゃって、赤身とうま味ですっていうのがぼーんと上にきてる。ということは人々の食の好みや健康志向まで変わっちゃうんだ。だとするならば、生産する側もそれに嗜好を合わせた開発をするべきだと思っているということで、愛媛県は5年かけて鹿児島から持ってきた霜降りだらけの牛肉を改良して、脂肪を落としてうま味を増すということにチャレンジをしました。5年たってようやく成果が上がって、元の牛と比べると脂肪分が15%ダウン、おいしいと感じるうま味成分はグルタミン酸というんだけど、グルタミン酸の含有量が2.5倍の牛ができました。それを愛媛あかね和牛という名前に、27年度から売り出しを始めているんですが、やっぱり、まだ量が少ないんだけど、うちに仕入れたい、仕入れたって殺到してるんですよ。だから、やっぱりそういう消費者の好みっていうのを常に見極めるっていうのは大事な視点だと思います。

幸いなことに宇和海っていうのは、本当に養殖業を進めていくために恵まれた環境が整ってるんですね。それは海の深さ、それから、水温、それから、黒潮であろう流れがどんどん変わっていくんでプランクトンが非常に、赤潮は別としてね、非常に良質な水質が担保されてるんで、例えば、和歌山県と愛媛県で同時に同じお魚を栽培始めたとするならば、1年後に愛媛県では、宇和海では1.5kgになるものが、あちらでは1.2kgにしかならないとか、それだけ、海の力が強いってことなんで、かついろんな方々がチャレンジしてくれてるんで、素材については魚種も豊富ですよ。さっき言ったタイは日本で出回っている養殖ダイの6割が愛媛産になります。その他にもブリやハマチも多いですし、今、アメリカっていう、さっき話しましたが、日本で出すブリっていうのは5kgぐらいなサイズなんだけど、アメリカでは5kgは全然売れなくて、10kgにしないと駄目だった。10kgにしたら、えっ、びっくりするような値段で売れるというの分かったんで、今、宇和海で10kgに育てるブリの試験を始めています。そういうふうに相手の

求めることに合わせた生産をするっていうのも、まず1つの手段。

それから、もう1つは素材がいいが故に、加工するという技術をそこに付加して、さらにおいしさに磨きをかけるという。そういう意味では、宇和島水産高校はいろんなね、食品工場なの、あれ。鯛めし缶詰とか、マハタぶるるん井とか、いろんなものをね、開発して世に出してくれてるんで、あの鯛めし缶詰なんかは、本当おいしいみたい。だから、ああいう試みは素材がいいが故に、それを生かした商品開発はぜひ高校生の視点で、これからも取組みを続けてほしいなと思います。

フィッシュガールについては、もういろんなところで一緒に来てもらってるんだけど、まず彼女たちが解体ショーやったら、そこでマグロが売り切れます。非常に大きな戦力になってくれて、時には海外にも来てもらってますんで、前はシンガポールだったかな、やっぱり彼女たちが出てくると、もう拍手喝采で、あっという間に売り切れるのは、日本国内でも海外でも一緒だなということを感じました。フィッシュガール、今何人？

(参加者)

今、4人くらいです。

【知事】

もうちょっと欲しいね。ぜひね、またその流れが断たれることがないように、フィッシュガールの存在は愛媛県にとっても大事な存在なんで、伝統を築いてほしいと思います。

2. 国体後の愛媛県を盛り上げる核となるものについて

今年、愛媛県で国体が開催される。とても素晴らしいことであるが、国体の後の愛媛県について何を核にして盛り上げていくおつもりか、意見をお聞かせ願いたい。

【知事】

はい、国体というのはね、非常に長い期間準備をしてきたんだけど、そもそも今年愛媛で国体やりたいって手を挙げたのは、実は今から17年くらい前なんでね。競争、この年にやりたいっていったら、他もやりたいっていうところ出てくるんで、ある意味では競争になってしまうんだけど、その中で熱意が通じて、今年国体をやることが決まって、正式に決まったのがだいたい3年前です。そこから準備を加速させました。国体を開催するためにやらなければならない準備が3つあって、1つは37競技が行われるんで、それぞれ競技ごとに協会っていうのがあるよね。例えば、ハンドボール協会とかバレーボール協会とか、連盟っていう名前のあるけども、その協会が必ずチェックをしに来ます。この施設であれば国体規格をクリアしてますというチェックをもらって、それで全部の種目でOK取らないと国体が開催できないんですね。ですから、現在愛媛県ではだいたいそのチェック終わりましたんで、全ての競技の施設についての準備はできました。

ただ、ここに至るまでには、愛媛県そんなに東京都みたいなお金があるわけじゃなかったんで、できるだけお金をかけずに整備をしようということに一番心を砕いてきたんですね。ですから、新しいものよりも、つくるに当たって、既存のものを改修して活用しようというのを基本に置く。無駄なことは一切やらないということで、例えば、ボート競技なんかは、これまでは開催地は必ず76艇の規格艇をそろえなければ開催は認めないっていうルールだったんだけど、愛媛県からは交渉して、愛媛県の次の県とその次の県、3県で共同購入して、3県でその3つの国体その76艇を使わせてくれ。3年終わったらその3分の1ずつシェアするっていう、こういうふうなことで交渉したらOKが取れたんで、これだけで予算を3分の1になったんですね。3つの共同購入だから。あるいはエアライフルっていう競技があるんだけど、これはたかさんの、電子標的を用意しなきゃいけない。でも、さすがにこれ、そんなに国体終わったら使いようがない

んでね。次の県にうちがそろえたエアライフルの的を買いませんかって言ったらもう買っちゃってた。その次の県も買っちゃってます。その次の三重県がまだ買ってないっていうんで交渉して、約半額で買ってもらうことにしました。そうすると予算が2分の1になりますよね。そんなことをずっと積み重ねてきました。プールについての施設整備が一番高い頭痛だったんだけど、2mの深さがないと認めないって言われたんでね。県内に2mの深さのプールないんでね。そうすると新しくつくるか、もう諦めて県外で開催するか、仮設で建てるかとか、そういういろんな想定をしたんだよね。さすがに県外で開催するのが一番手取り早いんだけど、水泳競技っていうのは、オリンピック選手なんかもどんどん来るから、やっぱり盛り上がるんだね。それを県外でっていうわけにはいかないだろうということで、最終的に仮設のプールをつくることにしました。この前完成したんだけど、じゃあ、仮設して国体終わったら捨てるのかって、こういう話も絶対出てくるんで、どうしよう、どうしようって言ってやってるさなかに、南予の内子町が町営プールが古くなったんで替えるという話を進めてるっていう話を耳にしたんで、内子町と交渉して、その国体が終わったら2mのプールを1m20に成形をして内子町に運んで、内子町の町営プールに転用するというので、最終的に結末を迎えることになったんだけど、こんなことをやりながら、当初の計画していた設備費と比べると18億円ぐらい安く済んだ。この浮いたお金を選手強化とかおもてなしに活用していくという、そんなことをやりくりしながら行ってます。1個目が施設の問題。

2つ目はまさに受け入れ態勢の問題だったんだけど、選手、監督さんだけで2万数千人の方が来るんだよね。家族とか応援者とかいろんなの合わせると、動く人口80万人ぐらいになる。とてつもなく人が来るんで、その受け入れの準備が大変だったんですね。何が大変かっていうと、まず泊まる場所の確保。それから、移動するための手段、バスに頼るしかない、バス。宿泊先は結局民間のホテルとか旅館とか協力していただいて、何とかめどが立ったんだけど、そもそもない地域もあるよね。例えば、宇和島も足らなかった。それから、西予市が足らなかった。あと鬼北町。それから、四国中央市、この4つの町は泊まる設備が足りないというんで、どうしたかっていうと、5年ぶりなことになるんだけど国体で民泊。個人の家を提供していただいて、選手を泊めていただくっていうことで、地域あげて協力したいっていうことになって、何とか確保できました。

問題はバス、最後に残ったバスがですね、開会式の日には大変な人数を輸送しないといけないんで、合計で730台ぐらいっていうことが分かった。愛媛県内にあるバス全部かき集めても大幅に不足する。ということは、県外から持ってこなきゃいけない。でも、国体の季節って紅葉シーズンで、結構旅行とかで使われちゃうんでなかなか大変だったんだけど、四国全域のバス会社と、それから中国地方、岡山県とか、ああいうところのバス会社も、それはもう大変だから協力しますよっていうんで、その期間は愛媛県にバスを出してくれることになったんで、何とか確保しました。そういうおもてなしの体制の整備。

そして、もう1つは選手の強化。どうせなら、天皇杯、皇后杯、みんなの力で取りたいんで、計画的に選手強化を図ってきたんで、この3つを進めて国体を迎えることになりました。

さて、これ終わったらどうするかということなんだけど、天皇杯、皇后杯にこだわってるのは、やっぱり優勝したら盛り上がります。盛り上がったたらスポーツいいねっていう環境が一気に高まってきます。それをうまく活用して、例えば、3年後には東京オリンピックがあるので、施設はしっかりできてますから、東京オリンピックに向けての選手の育成。そして、またその先を見て、えひめ愛顔のジュニアアスリート発掘事業っていうのをやってるんだけど、これは小学生を対象に毎年アスリートにチャレンジしたい子、自由に参加して募集するんです。全県からだいたい三千数百人の子どもたちが来ます。第一次選抜で体力測定をして500人ぐらいになります。その中からまた投げる、打つ、跳ぶ、走る、組手をする、いろんな種目をやってもらって特性を見極めて、最終的に100人ぐらいになります。その100人を対象に各競技者の指導者も入ってき

て、この子はどの競技に向いてるかっていうのを見極めていきます。場合によっては、その競技をやれば全日本チャンピオンも狙えるよと。あるいは世界にも行けるよというアドバイスをします。やるかやらないかは、いやいや自分は他の競技がいいですって言えばそちらに行くし。ただ、この競技でいったらすごいことになるかもしれないよっていう、そういうアドバイスをする事業を今立ち上げてるんだけど、こういう若い、小学生、中学生の育成から始まって、オリンピックそのものをアスリート育成にも結び付けていきたいというふうに思います。

それから、せっかく施設が整ったんで、例えば、ワールドカップできるかどうか分かんないけどね。ワールドカップやオリンピックの事前合宿とか、こういうものの誘致にも活用できるんじゃないかなというふうに思ってますんで、いずれにしてもスポーツっていうのはやる楽しさもあれば、見る楽しさもあれば、応援する楽しさもあれば、支援する楽しさもあって、それをその力をみんなが共有できるのが国体。そして、また天皇杯、皇后杯獲得だと思ってるんで、何とか当面はこの獲得に向けて、全力で力を合わせていきたいと思います。

3. 西予市にある高校を1つに統合することについて

私は西予市の明浜町に住んでいるが、西予市にあるいずれの高校も、定員に対して受験者数が少なく思える。そこで、西予市にある高校を1つに統合するという案をどう思うか意見をお聞かせ願いたい。

【知事】

非常にこれ難しい課題だと思うんですね。僕これ参考になるかどうか分かんないんだけど、昔松山の市長っていう仕事をしてました。そのときに中島町という島を合併することになりました。当時その島には3つの、これ高校でなくて小学校だったんですね。どんどん子どもの人数が減ってしまって複式学級で、もう維持ができないという問題が浮上したんです。でも、地域の大人たちは自分の地域から学校がなくなるのは嫌だ。火が消えてしまう。だから、どんなことがあっても存続、残してほしいっていう声が上がりました。でも一方、子どもたちは同じ島なんで、通学時間が長くなっても統合をして、たくさんの先輩や後輩、同級生が欲しい。これ、子どもたちの意見。だから、立場、立場で多分学校の問題って見方が違ってくると思います。

もう1つの経験は、松山の山のほうにある日浦小学校っていう学校で、ここも同じように人口が減って子どもがいなくなって、廃校の危機になりました。こちらは地域の人たちがどんなことがあっても学校を残すというまとまった気持ちになるんですね。当時の僕のとこに来て、校区外の生徒を小学校で受け入れたいと。でもやるからには2つ問題があって、1つは特色ある学校というものが打ち出せるかどうか。もう1つは、受け入れる地域がまともされるかどうか。この2つがないとなかなか難しいですよっていったら、皆さんが町内会費に上乗せして、校区外の子どもたちを迎えるのに、みんなでお金出そうっていうんで、そんなところまで始まって、あそこは山の中なんで、森の緑の少年隊っていうね、環境学習を徹底的に進める小学校にしたんです。今どうなったかっていうと、圧倒的に校区外から来る子どものほうが多くなっちゃって、ものすごく活況を呈した学校になってます。もちろんそのときの条件として、そこまでやるのであれば、マイクロバスを民間企業から寄付していただいて、それを中心部から山の上までだいたい三、四十分かかるかな、通学バスっていうの走らせてるんだけど、その自分たちの地域の生まれ育った子どもじゃない、その地域にいる方々の子どもじゃない、地域を活性化するために、自分たちはわが子のように受け入れますっていう環境ができたのが、日浦小学校のケースなんですね。

ということで、まず、統合を考えるときには、いろんな意見があるということに気を付けなきゃいけないということと、もし存続をしたいということになれば、今言ったような特色のある学校づくりと、地域をあげての受け入れ態勢ができるかどうか。ここにかかっているんですね。例

えば、南予でいうと、長浜高校は一時危機的な状況だったんだけど、水族館部の活躍で今外から来るようになって、今盛り返しの兆候が見え始めました。実は、昔はですね、ある一定の人数に減っちゃうと、もう半ば強制的に統合っていうふうにしてたんです。でも、今言ったように、いろんな意見があって、取り組みようによっても変わるんで、今はそうしないです。3年間チャレンジ期間っていうのを設けています。3年間本当にやってみますかっていう呼びかけをして、1回定員割れしても、その3年のチャレンジ期間の間にみんなの努力で戻せば、またゼロから振り出しに戻すというような仕組みにしました。だから、いきなりこう機械的にやるんじゃないんで、今言ったようなチャレンジ期間を設けることによって、廃校とかそういう統合の話が出たときに、どうすればいいかっていうのを機械的に決めるんじゃないんで、皆さんと一緒にじっくり考えて、チャレンジするかどうかも含めて、どうですかっていう投げかけをしようというふうなことで今県は構えていますんで、ぜひ、僕も今どっちがいいか分からないんで、ただ、中にはね、統合したほうがいいっていうお話があって、ひょっとしたら、最初に言った中島の小学生が言ったように、人数の多いほうがいいっていう話なのかなとも思うんだけど、そのあたりは地域の人たちともよくよく意見交換しながら考えていけばいいんじゃないかと思います。

4. 三間高校を防災の勉強と実益を備えた高校として指定することについて

先ほど知事が言われていたが、愛媛県は、南海トラフ地震が起きることで甚大な被害が予想されているが、三間という地域は山間部で津波の危険がないため、防災の活動ができると考え、三間高校の一、二年生の10名程度は防災士資格を取得予定である。県のほうで、防災の勉強と実益を備えた高校として指定等していただけませんか。意見をお聞かせ願いたい。

【知事】

どういう。

(参加者)

県のほうで、一、二年生の多くの後輩たちが、防災士資格を受けて、地域防災活動などを通してできることで、三間の特色になると思うんですが、どう思われますか。

【知事】

学校現場があって、の単位で、そういう訓練をするのはすごくいいことだと思うんで、今、実はさっき申し上げたのは、地域の自主防災組織の推薦を条件に、県が東京の団体を引っ張ってきて、愛媛県で講習を受けて資格を取ってもらうという、こういうやり方してるんですね。ただ、この資格取るのは結構大変で、2日間講習受けなきゃいけない。最終的に試験を受けなきゃいけない。費用はそういう条件さえ整ったら、公費出すんだけど、かなり時間がかかってしまうんで、今もう1つ考えているのは、各県立学校の先生に、これは公の立場だから、資格者を増やしていく。各学校単位に複数人の防災士の資格を取得した先生を誕生させて、全県の高校に配置する。そうすると、この先生は知識を持ってる。講習を受けて、講習ができる、指導ができるという立場に立つんで、その学校の防災士の資格を持った先生がリーダーとなって、一、二年生に対して講習をするとか。そういうことが一番早い道のりかなというふうに思ってるんで、例えば、三間高でね、三間高校は防災士資格取得者先生いますかね。

(事務局)

4人程度です。

【知事】

4人いるって。その先生に、ぜひね、一、二年生に講師をしてくださいって言って突き上げたらいいいと思う。ぜひ、必ず動いてくれると思いますから、はい。

《補足説明》〔教育委員会〕

県教育委員会では、平成27年度から県立学校教職員の防災士養成に取り組んでおり、防災士資格を取得した教員は、各学校において防災教育・防災管理の中心的な役割を担っています。

例えば、防災士資格を取得した教員が、ホームルームの時間等を利用して、地域の防災マップを紹介しながら生徒に災害時の避難経路や防災体制について考えさせるなどの取組みを行っているほか、防災士資格の取得を希望する生徒に、資格取得試験の想定問題を使って指導を行うなど、高校生の防災士養成にも取り組んでいます。

5. 愛南ゴールドなど隠れた宝の全国的なアピールについて

愛南町には、ぴちぴちな魚や愛南ゴールドなど、日本一の素敵な宝がたくさんあるが、その宝はあまり生かしきれてないと感じている。沖縄や東京に販売実習に行かせていただいたが、日本一にもかかわらず、全国的に知られていないことが分かった。愛媛県でも愛南ゴールドや魚などはあまり知られておらず、アピールがしきれてないのではないかと考えている。知名度が低いとなかなか売れず、第1次産業で生きていくのが難しく、働き手が減る一方だと考えており、知名度が上がり全国的に売れるようになれば、第1次産業で生きていけるようになって、また、働き手も増えるのではないかと考えている。そういった愛南ゴールドや魚など、隠れた宝を全国的に広げることについての考えや意見をお聞かせいただきたい。

【知事】

先ほどの営業部がまさにその橋渡し役をやっているんだけど、いつも愛南ゴールドで戸惑うのは、愛南町へ行くと地域によって河内晩柑って言ったり、美生柑って言ったり、愛南ゴールドと言ったり、一体どの名前を使ったらいいのかと、この辺は非常に悩ましいところですね。まず、問題は本当に数少ないお客さんに高値で売るということだけでやるのであれば、その路線でいいと思うんだけど、広くやるにはちょっとそのあたりの協調、協働性っていうかな、これをどうすればいいかっていうのは、考える必要があるのかもしれない。ねっ、3つあるよね。中身が、つくりも一緒だよ。だから、そこら辺僕らも行くときに、美生柑の、っていうと、愛南ゴールドや、と言われたりね、困るときある。だから、そのあたりがちょっと難しさがあるなと思います。

まず、ものを売るときっていうのは、まず絶対的な条件はいい品質、いいものでなければ長続きはしない。品質というものに徹底的にこだわる。この品質を側面的にバックアップするのが愛媛県の県庁にある、各地だったら吉田町にあるみかん研究所。魚だったら宇和島市にある水産研究センター。それから、肉だったら野村西予市にある畜産研究センターや、それから、鶏肉だけだったら養鶏研究所。こういうところに専門家の皆さんがいて、例えば、いいものをつくるための研究を常にやっています。そこから生まれたのが愛媛県のさっき言ったいろんなかんきつの品種であったり、それから、魚もそうなんだけど、魚でいえば、最近ではさっき取り上げた伊予の媛貴海なんかもそうだと思います。いいものをまずつくるのが前提。

次にネーミング。やっぱりネーミングってすごく大事ですね。しかも地域でピーンとくる名前と、場合によっては大都市や東京で響く名前の響きっていうのは全然違うケースがある。やっぱりそこを間違えると、何かこう全然受け止められないっていうケースもあるんで、ネーミングっていうのがまず大事になります。

それから、その次に今度はマーケティング。これはどの層をターゲットにするかっていう分析もあれば、その層を確保するためには、どの地域がいいかっていうのを地域の峻別もあるし、そういうのをマーケティングという全体的なプログラムの中で狙いを絞っていくと。チラシなんかでもまんべんなく配るよりは、この商品に関心のある層が多いところを集中的に配ったほうが絶対

効果があって、マーケティングっていうのはすごく大事です。

最後にこのマーケティングの後に出てくるのが販売戦略。これは例えばテレビを使った方がいいのか、チラシがいいのか、スーパーマーケット攻めたらいいのか、あるいはネットで勝負したらいいのか、これはターゲットによって全然変わってくるので、その販売戦略。このプランニングを組み立てることによって、販路の開拓っていうのはできると思います。

今まで愛媛県っていうのは、特にいいものをこれだけつくってるんだけど、売り方が南予は、申し訳ないけどおとなしいなと僕もつくづく感じてました。だから、それをやるために今いろんな刺激的なね、例えば、養殖っていうと我々どうってことないんだけど、東京のおすし屋さんに入りました。おすし屋さんに入ったらいきなり大将が言うのは、お客さん、今日はいい天然もんが入るとるんでっていうことになる。何か天然のほうが養殖より上っていうイメージができちゃった。でも、今の養殖の技術っていうのはものすごい進んで、場合によっては天然を凌駕するような品質を与えられるような状況になってる。この話をしたら、最初なかなか愛南町や宇和島の魚関係者も納得はしてくれないんだね。そこで僕が言ったのは肉を考えてみてください。肉は、高級牛肉っていうのはどういうものですか。神戸牛とか松阪牛とか。この肉っていうのは、畜産農家が自分の地域で手塩にかけて大事に育てたものが高級牛肉でしょう。まさに養殖牛や。養殖牛が肉の世界ではこれだけの価値、輝きを持つてるのに、何で魚はそういうアプローチができていないのか。まず、ここから考えを変える必要があるんじゃないかということで、養殖という名前で東京のお店が反応してくれないのであれば、新しい名前を付けようというのが愛育フィッシュっていう打ち出しなんだけども、こういう新しい打ち出しをすると、最初は慣れてないから違和感があるけども、物事っていうのは、しつこさっていうのも大事で、例えば、運動なんか考えると、基礎練習っていうのをずーっと続けていかないといけない。この間、成長を実感できないよね、運動選手。決してその運動能力の向上っていうのは、右肩上がりや実感できるものではなくて、基礎練習ずーっと積み重ねて、ある日突然ぼーんと成長する。でまた同じようにじーっと、ここで挫折するかしないかは個人個人の考え方なんだけど、ここを我慢して乗り切ったときにぼーんと成長するんだね。だから、今言ったネーミングの浸透なんかも、ちょっとやっても全然反応がないからってすぐだいたい諦めちゃう。でも、ある程度我慢、我慢、我慢、我慢でしつこくやっていると、ぼーんってくるっていうのがある。そういうふうな粘り強さっていうのも、大事な視点になってくると思います。

例えば、みきちゃんなんて最初は誰も知らなかったけど、今はもうこのみきちゃんは、そうだな、小林製薬っていう会社があるんだけど、薬局ね。ここで眼鏡拭きクリーナーというのを全国販売した、パッケージで。年間400万パックぐらい売れてるんだけど、その全てにみきちゃんが印刷されてる。全国の、北海道行ってもみきちゃんが並んでる。それとか去年はマクドナルド。マクドナルドと交渉して、去年は愛媛県の甘夏ミカンを使ったシェイクを全国限定販売してもらった。今年も愛媛県のキウイを使ってもらって販売してもらいました。特に去年の甘夏ミカンについては、マクドナルドのカップ、シェイクのカップに西日本でみきちゃんを印刷してもらいました。そうやってじっくりやっていると、突如ばーっと脚光を浴びるときがあって、そこの我慢っていうのはすごく大事だと思います。

6. メガポット(飲料水保存タンク)の利用による南予地域の防災力の強化について

今回の意見交換に当たって愛媛が誇るスゴ技という冊子を読み、特に気になった、松山市に本社をおく株式会社小笠原工業所が開発した飲料水保存タンク、メガポットの利用について提案したい。近い将来、先ほど知事が詳しくお話しされたように、南海トラフ巨大地震が発生すると考えられており、南予地域にも大きな被害が及ぶと予想されている。そこで、南予地域の廃校となった校舎を防災施設として活用することを提案する。学校が廃校になった原因は少子化であり、私は愛南町出身であるが、私の出身中学校である城辺中学校を例に挙げると、平成19年度から現在までの生徒数はおよそ半分近く減っている。南予地域内でも同じように少子化が進み、廃校になっている学校が多い。その校舎を防災施設として利用することで、食料、救助用具、飲料水などを備蓄、管理することができ、また、災害時に地域住民の共助で減災に努めたり、先ほど紹介のあった自主防災組織の拠点となったり、情報発信の拠点となったりする。飲料水は先ほどのメガポットから確保する。このタンクは24時間、365日安心できる飲料水を確保することができ、通常時はタンク上部のソーラーや風力発電の電気で電源供給を行い、24時間殺菌灯を稼働する。そして、飲料水以外でも防火水槽や非常電源を兼ねそろえているので、非常事態に十分対応できると思う。このようにして、南予地域の防災力を高めていってはどうか。

【知事】

災害の対応として特に寝る場所の環境整備とか、それから、さらには食料の確保や、特に生きていくために絶対必要な水の確保、それから、医療関係、これはもう薬とかも含めてね。そういったものも構えるっていうことがすごい大きなテーマなんだけど、基本的にはこの水っていうのはもう絶対必要なものだと思います。廃校の利用っていうのは結構町単位で、あるいは市の単位でこういう活用したいっていうときにはですね、相談に乗るような体制になってるので、基本的にはそれぞれの市、町がどのような体系が出せるかによって、それを含めてバックアップするということはできると思います。廃校利用っていうのは、そういう意味で町の単位でちょっと1回考えてほしいなと思います。

この飲料水は非常にこれ僕もあまり知らなかったんだけど、今見ても面白い商品つくってるなと思いました。特にソーラーも含めて、24時間紫外線殺菌機能があるというのが、1つの切り口だろうと思います。あとはですね、この容量、サイズがどのぐらいの集落、地域に災害時にフィットするのか。そのあたりが研究課題かなど。ひょっとしたら、この会社は僕もまだ正直言って行ったことないんだけど、今ここに写真が出てるサイズだけではなくて、例えば、何世帯用のサイズはありますよとか、もうちょっと大きめのやつもありますよとか、そういう商品構成があるのかもしれない。ただ、そういったものがフィットすれば、十分に利用価値があるなと今感じましたんで、ちょっと僕のほうでも調べてみたいと思います。

《補足説明》〔県民環境部〕

同社の製品カタログによると、提案のあったメガポットについては、2,200人の3日分の水を確保できる20トンタイプのほか、40トンタイプ、60トンタイプ、100トンタイプの商品が用意されており、設置する避難所の避難者想定数にもよりますが、サイズ・容量的には、十分災害時の対応が可能と思われる(カタログ記載のとおり)ことから各市町にも本製品を紹介していきたいと考えております。

7. 予土線の本数を増やすことについて

今回、本校の代表として提言をするので、校内で生徒が困っていることについてアンケートを取ったところ、一番多かった意見が汽車の本数を増やせないかというものであった。本校には汽車を利用して学校に登校する生徒が多くいるが、例えば、予土線の松野方面の生徒は、12時台の汽車を逃すと次は16時台まで便がなく、本当に不便に感じている。また、私たち学生が困っているのと同じように、鬼北に来られる観光客の方も来にくいのではないかと思います。

もし、可能であれば愛媛県内で同じように交通で不便な地域の改善をして、そこに住む人々、観光で訪れる人々が、もっと行き来しやすいように改善していただけないか。また、その際に高校生にできることがあれば、教えていただきたい。

【知事】

そうですね、これはJR四国という民間の会社が運営しているんで、公益の公共機関でないんで、例えば、僕が増やします、増やしませんっていうのは、なかなか言える立場ではないんですけども、ただ、予土線っていうのは、非常に厳しい状況になってまして、JR四国自体が、昔は国鉄っていうね、会社だったんですね。公の会社であって、北海道から九州まで1社で全部やっていたんです。ところが、民営化、民間の会社にすべきだっていう当時議論があって、そのときに国鉄っていうのが解散して、JRというのが置かれた。民間会社になりました。そのときに、北海道と東日本と東海と西日本と九州と四国に完全に分かれちゃったんです。今一番経営的に困っているのが北海道、次が四国という状況なんですね。それは1つには人口が少ないということもあるんですけども、新幹線がないことが非常に大きな弱みになってます。新幹線というのは稼ぎ頭になって、その財源で、何とか存続できるという体制がつけられるのかもしれない。九州なんか新幹線が通って、非常に今順調になってるんですけども、そこで今かなり長くかかるけども、四国に新幹線をというふうなことが、何も便利性を向上するだけではなくて、将来にわたってJR四国を存続させるためには、それをやらざるを得ないということもあって、ああいう活動を起こしています。

実は今、今年その中で予土線が一番利用客が少ない状況なんですね。北海道もそうなんですけども、民間会社っていうのはそうなったときに、場合によっては廃線という可能性もあるんです。そうさせないためにはやっぱり利用者を増やすしかない。それは地域の方が利用するだけではなくて、観光客も増やすということも必要になってくるんですけども、なかなかJRにはこういうことをやるから本数増やしてくれとかいうことはよく言うんですけども、例えば、イベントと組み合わせるって手はあったんですね。いやしの南予博8カ月間やって、その間は集客が見込めるんで、JRとしても本数を増やしましょう。例えば、サイクリングで見込めるのであればサイクルトレイン、自転車が乗せられるような運行をやりましょうと。いろいろとこちらからの提案について対応はしてくれてるんです。でも、残念ながら抜本的な対策まではいってないのが現実です。そういう中で、JRもいろいろと工夫はしてくれてて、例えば、予土線3兄弟、0系新幹線とか、ホビートレインとかトロッコ列車を運行して、観光振興に寄与できないかなというふうなことも取組みとして行ってますから、我々も予土線利用促進対策協議会っていうのをつくって、何とかこの存続をキープするための取組みは行政のほうからも仕掛けはしているところです。そういう中で、本数を増やすっていうことは、それだけ経費がかかるっていうことで、民間会社とつながってしまうので、そう簡単には正直言ってできない。だから、例えば、将来長い目で見たときに、だったらバスのほうがいいやっていう意見が出てくるかもしれない。バスだったら割と運営コストが低いから、それによって本数を増やすとかですね、そういう可能性はあるかもしれない。鉄道ということになると、なかなか一足飛びにダイヤ改正っていうのも、これ年に一遍のことなんで、すぐにどうだっていうことはちょっとできないんですよ。

じゃあ、高校生に何ができるかっていったら、やっぱり地域の活性化に高校生の立場でどんどん立ち上がって、例えば、観光振興に寄与していただくとか、こういうのが一番やれることだと思いますんで、ぜひ、町づくり、観光振興、これはどっち、宇和島だっけ。

【参加者】

鬼北町です。

【知事】

あっ、鬼北。鬼北でもいろんな取組みしてると思うんで、そういうところには積極的に高校生も町の活性化のために力を貸して行ってほしいなというふうに思います。鬼北町にはいろんなアイデアは提供してるんだけど、例えば、日本で唯一鬼の名前の付く町だということで、前の町長さんに鬼という特色をね、大いに出したらいいんじゃないかっていうことで鬼丸ができた、ああいうモニュメントの作成に至った経緯があるんだけど、鬼嫁コンテストっていうのをやったらどうかって言ったら、本当にやっちゃって、そういうふうな面白い仕掛け、その地域にしかない仕掛けを磨くことによって、それが情報発信されたときに人が来るきっかけが生まれると思いますから、ぜひ、町づくりへの高校生の積極的な参加を、僕からもお願いしたいと思います。

8. 宇和島にアウトレットモールをつくることについて

本校はSGHに指定されており、フィールドワークでハワイや台湾に、国内であれば湯布院や隠岐に行ったり、その活動の中で、後期生がメインで、年間通して宇和島の産業中でかんきつだったり生産だったり、少し視野を広げてアジアの文化に絡めたりして研究活動を行っている。その中で、去年わが校の生徒が宇和島にアウトレットモールをつくれないう研究をして、宇和島は高速道路も通っているし、商店街もある。JRで行ったら終点駅があったり、アウトレットモールをつくるには十分ではというプレゼンをしたところ、聞いてくださった方々もすごく高い評価をくれた。宇和島にもアウトレットモールをつくったらという提案について、知事はどのように思われるか。

【知事】

そうですね、アウトレットモールっていうのは、例えば、規模にもよりますし、それから、何というのかな、どういう商品構成、お店が出てくるかということによって、その魅力っていうのは全然変わってきてしまうと思うんですね。例えば、東温市っていうところにアウトレットモールが、坊っちゃん劇場のところにあるんだけど、なかなかうまくいってない。だから、アウトレットモールイコール間違いなく成功するっていうことではないんで、これ商品売ることと同じなんですけど、マーケットの分析っていうのがすごく大事だと思います。

もう1つは、アウトレットができる観光客の利用もあると思うんですけど、一方で、地元の人たちの商店街離れてっていうのが進む可能性もあるんですね。その競合のバランスがどうなってるのかっていうのもすごく大事な要素だと思うんで、例えば、商店街の一角をアウトレットモール化するとかね、そういう発想があってもいいのかなと。そうすると商店街との共存という形が成り立つだろうし、商店街の皆さんも賛同得られるかどうか分からないけど、逆に言えば、僕が松山市のときに商店街の問題議論したときに、郊外店が増えたんでお客さんが減ってるって悩んでるんだけど、そうじゃなくて、この商店街そのものがショッピングモールという考え方できかないのっていう、そういう話し合いをしたことがあるんですよ。ある意味では商店街っていうのは、いろんなものが、お店が集まってるから、商店街の状況、特に空き店舗が多いところなんかは、その空き店舗空間を集約して、そこにアウトレットモールみたいなお店を集結させれば、全然違った商店街がまた誕生するんじゃないかなという気もするんで、ぜひ、そういった視点でのアウトレットモール化っていうのも、視野に入れて議論されたらどうかなというふうに思いま

す。

9. 通学路の安全対策について

私が通学している津島高校は国道沿いにあり、交通量が多く街灯が少なく、暗い道での交通事故や、狭い道での車との接触事故などが多発している。これは小学生や高齢者にも関わる問題だと感じている。そこで、通学路の安全対策について考えをお聞かせ願いたい。

【知事】

そうですね、ちょっと現場がね、それぞれ違うんで、その現場に行ってみないと分からないけど、基本的に地域を一番知ってるのはそこに住んでいる方なんで、その地域の方々が、今こういう状況にあるんでということで、まず津島だったら宇和島市か。宇和島市に相談があって、そこから県に上がってくるケース、県道の場合は県の方で、ぜひ、そのケースバイケースでまず通学路等々の整備っていうのは行ってるといことは基本にはあります。

昔やってて難しいなと思ったんだけど、とても狭くて、狭いっていうか狭くはないのか、松山市の久枝地区っていうところがあってね、そこは通学路なんだけども、歩道がなくて、通学路で交通事故が起きて危ないということで広げてくれっていう話があったんですよ。実はそれまで事故がほとんど発生しなかったんです。なぜかっていうと、これはちょっといいケースではないけど、本当にあった話で、危ないっていう意識がものすごく強かったんで、みんな注意をしながら通学してたんで事故がなかったんです。道路はそれでも狭いから危険かなって広げたら、逆に事故が増えちゃったんです。ああ、広いからって車のスピードが上がっちゃって、注意もかつてよりはしなくなったんで、逆に事故が発生し始めたっていう、そんなケースもあったんで、地域ごとによく分析をしてやる必要があるなっていうのは、そのとき感じたことです。

ただ、いずれにしましても、いま学校の周辺の状況っていうものを的確に分析して、逆にそういう分析してみたらいいのじゃないかな、交通量がこうですと、事故発生率がこうですと。高校生の立場でそういう数字に基づいた分析をして、だから、ここはやるべきだっていうような行動があったら、行政も多分動くと思いますね。そんな分析してみたらどうかな。ぜひ、トライしてみてください。

10. 地元に戻って活躍したいと思う若者としてみたいことについて

知事が若者としてみたいことをお聞きしたい。高度経済成長のころなど、昔は地元から外へ出ていくことが進歩だと考える人が多くいたという話を聞いたことがあるが、今は価値観の多様化や変化があって、外へ出ていくだけではなくて、外へ出て学んだことを地元を持ち帰って、自分や地元の人々が楽しく幸せに過ごすために働き、地元で活躍するということも1つの進歩ではないかと考える若者が増えていると思う。実際、私も進学後は愛媛に帰ってきて、愛媛の教育現場で働きたいという夢がある。そのように地元で活躍することも1つの進歩だと考えて、地元へ戻ってくる若者たちとしてみたいことがあれば教えていただきたい。

【知事】

地元で・・・

（参加者）

地元に戻って地元で活躍したいと思う若者としてみたいことがあれば。

【知事】

してみたいこと。

(参加者)

はい。教えてください。

【知事】

そうね、本当にその人間の原点っていうのは、やっぱり郷土愛っていうのが1つあると思うんですね。もちろん家族が一番大きな存在ですけども、やっぱり郷土に対する愛情っていうのは、すごく誰しもが持つと思います。

昔は高度成長時代だったんで、外向きも外向きで、海外に行きたいという思いがあったんで総合商社っていうところに入って、世界中転々としてたんですね。でも、外を知れば知るほど、ビジネスを通じてだったけれども日本の良さが見えてくるし、また、東京にいればいるほど地方の良さが見えてくるし、それで戻ってきたっていうことだったんだけど、例えば、当時は帰ってきたところは東京のリズムに慣れてたんで、すごいゆったりとしたスピード感と、穏やかな町の表情にもものすごい戸惑った。あの空間からここへ戻って来て、自分の生活リズムどうなるだろうと思ったけれど、今もう完全に逆。もう東京へ仕事で行くけれども、もう3日が限界だね。とてもやないけど過ごしたいと思わないし、だから、価値観がそれぞれ違うから一概には言えないけれども、何が人の幸せなのか、何が生きがいなのかっていうのは、本当にそれぞれの人たちが考えてほしいなと思います。

その中で両方経験した立場から言うと、生活するという面において、東京ほど暮らしにくいところはないですよ。考えてみれば、例えば、そうだな、収入は確かに東京のほうが高い職場あるかもしれないけども、経費のかかり具合が半端じゃないね。愛媛だと例えば松山だと部屋を借りました。2万円、3万円、そういう部屋もちゃんとあります。僕が結婚したときに借家に住みました。そのときは駐車場2台付いて新築一戸建てで、中心部から車で15分ぐらいかな、久米といふところなんだけど、それが6万5千円ぐらいの家賃でした。東京は駐車場1台、車1台分の駐車場借りるのに、月5万円ぐらいかかるんです。4万円から5万円かかるでしょう。ということは収入がいくらあっても追いつかないよね。ものは高いし、それから、移動費は充実はしてるけど高いですから、自由になるお金っていったら、どっちが豊かっていったら圧倒的に地方ですよ。しかも、朝はぎっちぎちの通勤ラッシュが待ってる。もう見たことあると思いますけど、詰め込むように、もう汗で夏なんかぐったぐたになるぐらいの通勤時間というのが毎日のように襲いかかってくるし、それから、今はだいぶ変わってきたけども、当時の残業っていうのもものすごくひどくて、僕が最後、今では完全にブラック企業に指定されて大問題になるような企業で、どうだろう、1年間について平均して会社出る時間が午前1時から2時だった。だから、電車で帰ってこない。もうない。終電から。それぐらいのハードワークが連日続いて、次から次へと入院するやつが周りから出てくるような状況だったんだけど、そういったものを考えると、あの空間は嫌だったっていうのがしみ付いているんですよ。

時代が変わって、当時は例えば、通信手段っていうのが電話とファクシミリとテレックスしかなかった。それで海外の貿易なんかはやりとりしてたんだけど、1986年にインターネットというのが登場して、それから先はもう通信技術が、皆さんにとっては当たり前かもしれないけど、1986年ぐらいの段階では何にもなかった。そこへ初めてアメリカの軍事用システムであったインターネットが公開されて、世界が情報網が結び付いたんですね。当時はそうはいつでも技術がそんな大したことなかったんで、通信速度も遅いし、だってフロッピーディスクとか知らないでしょう。フロッピーディスクが記憶媒体としてメモリーの代わりだった。これたかだか2MBの容量しかない。そういうふうな情報環境の中でビジネスっていうのも考えざるを得なかった。これ今これだけの光ファイバーがある、無線LANが開通する、インターネットが普及する、スマートフォンが出てきた、タブレットが出てきた。そういうものもある程度誰しもがどこにいても活用できる時代に入ったんですね。となると、場所はある限り関係なくなってきた、仕事するのに。地方に拠点を置きながら、最先端の仕事もできる環境が、通信技術の発展とともに整えられてき

たということも言えるんじゃないかと思います。

現に、これは徳島県の、本当に町なんだけども、ここはラッキーだったのは、たまたま国の設備投資で、近くにかなり大型の光ファイバーのケーブルが通ってたんです。ところがそんな田舎だから、この光ファイバーほとんど使われてなかったんです。これだけの容量の光ファイバーでちょこっとしか使ってない。道路で例えるならば5車線、6車線の道路に数台しか車が走ってないような、そんな状況だったんですね。これは光ファイバーじゃないと。使われてないのはダークファイバーとか、そんな名前と呼ばれてたんです。ここに目を付けた人がいて、その本当に小さな町なんだけども、このダークファイバーを活用した町づくりをしようというプランニングをしたんです。日本の国の中で、どこよりも最速のネット環境が保証されている町ですって、こういう売り出しをしたんです。その情報処理で膨大な情報処理を必要とする業種に目を付けて、そこでピンポイントで当たったところが動き始めたんです。どういう業種が来たかっていうと、4K、8Kのテレビの技術開発、プログラミングの開発をする、そういう、そんな大きくない会社なんだけども、技術で勝負してるから、そういうところが関心を示して移り住むようになったんですね。町は何やったかっていうと、空き家も多かったんで古民家をどんどん提供した。今、その町1回だけ行ってきたんだけど、オフィスは古民家なんですよ。そこに若い人たちがいっぱいいて、土蔵があって、わあ、随分格式のある土蔵だなと思って中開けたら最新のサーバーが入ってるんですよ。古民家の中入ったら4K、8Kの画面とかがべたべたと並んで、若者がカタカタ仕事してるわけ。いったいこれ何なんだろうと思った。さらに、そういう会社が十何社集まってき始めて、彼らが考えたのは、これだけ活況を呈してきたんで、おいしいものが食べたいねって言い始めた。じゃあ、俺知り合いがいるよ、大阪にいいやつがいるから引っ張り込もうって、今度はその大阪のレストランやってたやつを呼んで、イタリアンのお店が古民家に誕生した。そうやってお店がまた増え始めて、あれよあれよという間に注目を浴びる町になった。

何が言いたかったかっていうと、かつてと違って通信技術の発展というものが、ローカルにおいていろんなビジネスをできる環境を用意してくれたというふうにして、だから、何も東京へ行かなかったら最先端の仕事ができないという時代ではなくなったということは、これは皆さんの時代の非常に特徴的な側面かなというふうには思います。

ただ、やっぱり経験はいろいろしたほうがいいと思うんで、最終的にはぜひ戻ってきてほしいんですけども、やっぱり若いうちに1回外へ出て、外から故郷を見つめるとか、あるいは海外において、こんな異文化があったり、慣習の違いがあったり、価値観の違いがあったりっていうのを知って体感をするっていうのは必ず役に立つことだと思うんで、そういう意味で外に出るっていうことは経験したほうがいいかなというふうには思いますね。最後はぜひ帰ってきてください。

11. 南予でのサイクリング振興について

サイクリングについて伺います。

現在、本校はSGHに指定されており、海外の生徒と交流する機会がとても多く、現在ハワイの短期留学に行っている子らもいる。また、先日は台湾の永豊高級中学の生徒をホームステイとして招いて交流を行った。知事も先ほどしまなみ海道ではたくさん外国人観光客が訪れているとおっしゃったが、南予でサイクリングをするときに、もっともって南予にそういう外国人観光客を呼び込むことができれば、サイクリングをしている子どもたちや人や、地域住民の皆さんと外国人がもっともって交流できて、南予の魅力を外国の方にも知っていただけるいい機会になるのではないかなと思うが、知事は、南予でのサイクリング振興についてどのようにお考えかお聞かせ願いたい。

【知事】

このサイクリングっていうのを導入したときに、最初は何というのかな、五里霧中で始めたんですね。当初、僕が考えたのは、計画的に物事を進めていこうということだったんだけど、第1段階、第2段階、第3段階という計画をプランニングしました。

第1段階っていうのは、しまなみっていうのは世界に出せるんで、とりあえず、食い付いてもらうためのコンテンツとして磨きをかけようということで、第1段階の目標はしまなみ海道をサイクリストの聖地にするっていうプランニングだったんです。そのプランニングを合わせてブルーラインであるとか、Wi-Fiスポットの整備であるとか、サイクルオアシスのネットワーク化だとか、いろんな仕掛けをしてきました。それを花開かせるために行ったのが、世界サイクリング大会なんですね。高速道路止めて、自転車に開放すると。やっぱりこれは見事にはまって、わーっと人が殺到する。でSNSに拡散する。これが第1段階だったんです。

第2段階は2次情報の提供。しまなみはもう有名になってきました。実はここへ来たら南予のほうにはこんなコースありますよ、東予にはこんなコースがありますよ。2次情報を提供することによって、愛媛全体に人をいざなうことができないかなっていうのが第2段階の構想で、これは愛媛全体をサイクリングパラダイスにするっていうのが目標になってますね。これ今進行中です。

第3段階はさらにその先で四国、お遍路さんっていう文化があるから、四国全体をサイクリングアイランドにしようっていう、こういう構想で今、こちらの第3段階については、キックオフをしたばかりです。

自転車っていうのは、日本では、多分、通勤、通学、買い物に使う移動手段というふうにしかなかったってないと思いますね。ところがアジアやヨーロッパやアメリカへ行くと、全く違う。自転車っていうのは使い方、乗り方を考えれば、人々に3つのプレゼントをしてくれるツールになるという考え方なんです。何をプレゼントしてくれるかっていうと、1に健康、2に生きがい、3にサイクリングを通じて知り合う、出会う、友情。健康、生きがい、友情をプレゼントしてくれるツールになる。これをこの活用の仕方を自転車新文化と名付けたんです。この自転車新文化を愛媛県から全国に情報発信しようという試みを今しています。それが広がったらサイクリングの愛好者が増えてきて、でも、サイクリング楽しいけどやっぱり聖地のしまなみには行かないかねって行ったら2次情報が。愛媛もっと走ろうか、そういうふうなのができないかなっていうことで、今着々と進めていますね。

南予も十分に可能性があると思います。例えば、愛南町だったら僕も走ったけど、あそこの漁港からスタートして、石垣の里行って、それから、上へ上って高茂岬へ行って、そっからぐるっと回って西海におりてきた、ああいコースだったね。高茂岬は絶景だよ。石垣の里のあの風景なんかもね、すごい。それから、宇和島ではね、遊子の段々畑からスタートして、ずーと上へ上がって、これちょっと坂はきついけど、あそこ行くと何だっけ、運河、日本で一番狭い細木運河、あのコースも海岸沿いですごくきれいだったし、それから、そうだな、ちょっと今日はいないけど、伊方町なんかはあそこのきらきら館というところから、ずーとあそこのメロディーライン走って、あそこの港まで行って戻ろうかなと思ったんだけど、あと、少し行けば灯台まで行けるっていうんで、地獄のような上りだったけど、そこをウォークしてみたりね。まあね、右に瀬戸内海、左に宇和海、風車の風景あり、圧巻の風景がそこには待ってたんだね。だから、さっき最初に言ったけど、南予の魅力の1つは自然が豊富だよ。サイクリングには最高の環境がある。だから、それをどう結び付けていくかは、今県内の市長さんや町長さんに投げかけて、受け取り方は濃淡があるから、進んでるところと進んでないところがあるんだけど、十分にやり方によっちゃあ通用すると思っています。

特に海外のお客さんを引っ張り込むためには、やっぱり受け入れができないとアウトだよ。そうすると外国語表記の案内板がちゃんとできてるのかなとか、あるいは、パンクしたときのサ

ービスができるのかなとか。例えば、さっきのサイクルオアシスっていうのはコンビニなんかでもいい、お店でもいい。そこにサイクルオアシスって書いてあって、そこは空気入れが無料貸し出しされるとか、そういうふうな地域の協力が。お店の前には必ずサイクルスタンドがあるとか、これだけでもメッセージになる。そういう環境を地域ごとに整えていけば、いろんな方々が訪れる環境が生まれる可能性があります。

それを情報発信するのが僕がやることなんで、タブレットちょうだい。実はもうすでにつくってるんだけど、これは愛媛マルゴト自転車道っていうサイトなんです。例えば、コースガイドというのがあります。これ南予全部やってます。プロに設定してもらった県内 26 のコース、ファミリーコースが 15 と、中・上級者コースが 11 だったかな。そういうコースを選定してもらいました。その全てに今ブルーラインを敷いてます。かつ例えば、南予だったらどこあるかな。愛南さんさん輪道とかね。これをどんなとこなのかなって知りたいとき、これにアクセスすると画面が変わって地図が出てきます。こんな場所ですよ、コースとして。こんな形でまず説明がある、地図があります。やっぱりどんなとこか分かんないから大丈夫だろうかって、高低差の地図が出てきます。あつ、何mぐらい上らなきゃいけないかって、これ全部。だから、自分の実力でここは無理だなと、ここはいけそうだなっていうのが分かる状態になってます。その下行くと観光スポットが出てきます。全てのコースに高画質の動画を用意しました。この愛南に行くとこんな風景が皆さん体感できますよっていう。そのコースを走ると、皆さんこんな風景で楽しめますよっていう、これがサイトの情報発信だけ、実はこのサイト、多分とてつもない、つくるのにお金がかかるんです。でも、愛媛県 1 円も出してないです。どうしてこれができるかっていうと、たまたま僕が知り合った人が、愛媛県のサイクリングの取組みに関心を示してくれました。こういうことやるんだしたら、自分の会社として協力したい。ついてはこの動画のサイトを全部自分とこで作りましょう。1 つだけ条件を出された。このサイトが出来上がった後のメンテナンス、管理運営については、愛媛県の障がい者の皆さんの雇用につなげてくれ。今このメンテナンスは愛媛県の障がい者の方々が全部メンテナンスやってくれます。そうするとその会社にとっては、社会貢献として位置付けられる事業。それで、無料でやってくれる。その会社はマイクロソフトっていう会社で、たまたまその社長さんと知り合いで、これをできないかという、無償でつくってくれるということで、これはもうアップされてますから、1 回皆さんの町の風景も出てくるので、見てみてほしいと思います。

12. 才能のある生徒たちが南予地方で活動できる部活動の仕組みづくりについて

先ほど中村知事がお話しされたように、愛媛県では少子高齢化が進んでいて、特に私が住んでいる南予地方では、少子化によって中学校や高校の部活動の数が減っているのが現状。地元の部活動の数が減少することによって、その生徒が続けたい部活動がなく、才能のある生徒が南予地方外にと部活動留学してしまっている。

そこで、才能のある生徒たちが南予地方に戻って活動できるような仕組みづくりが必要だと思う。なぜかという、私の同級生や後輩に南予地方外で部活動留学をしている生徒が多数いるからである。部活動が盛んな松山地方や私立の中高へ進学し、技能を伸ばすことはとてもいいことだと思うが、それでは、南予地方の元気がなくなり、少子化が加速する原因にもなってしまう。有望な選手が外へ出ていくことで、地域としても損失になっていると思う。地域の中学校や高校の部活動が活性化することは、地域の活性化に大きく影響すると思う。

そういった南予地方の才能のある生徒の流出を防ぐためにも、地元の中学校、高校が協力し、部活動を分担したり、学校間へ共同のクラブチームをつくり、週に数回を目安に活動を行うなど、対策が必要だと思う。反対に、中予や東予から南予地方に部活動留学してきてくれるような仕組みづくりができれば、少子化に苦しむ南予が少しでも活性化するのではないかと思う。

南予で選手を育て、また少子化を防ぐためにも、中学生、高校生が希望する活動が、南予にとどまって実現できるような施策をお願いしたい。

【知事】

はい、恐らく今の人口の状況からいうと、全ての学校であらゆる部活動を用意するっていうことが果たしていいかどうか、ちょっと疑問を感じてるんですね。人数が多ければいいんだけど、逆にそうなる今言ったような現象が起こってしまうかなと。だとするならば、これも指導者が大事なんだけど、学校ごとに特色がある部活動っていうのを、今言った地域のある程度広域でね、南予での間で分担していくっていうことも1つの選択肢かな。もう1つは、今、非常にいい提案で共同、合同練習っていうものを、クラブチーム化みたいな形でやるっていうのも1つの提案なのかなっていうふうにも思います。ちょっと先生方の受け入れ状況が、余力がどれぐらいあるかというのは、その学校によって違うんで、一概にはすぐできるとは言えないんだけど、発想としてはすごくいいんじゃないかなというふうに思います。

そうですね、やっぱり特色ある部活動っていうのは、これは運動に限ることなく、人を呼び込む力になるケースがあるんですね。さっきちょっと取り上げた長浜高校なんかは水族館部の活躍、国際大会の優勝を機にやってみたいという子が増えてきたり、あるいは伊予高校っていう学校は、地元の子以上に松山からどんどん来ちゃって、それはブラスバンド、吹奏楽部、あの学校で吹奏楽やりたいっていう、そういう生徒がどんどん来てますね。そういう意味では、今回のえひめ国体を契機に馬術部を南予につくったり、やったり、そういう特定の種目で、あそこ行ったらそこで上が目指せるような特色ある部活動づくりっていうのも、1つの提案かなというふうに思ってます。

今、最初に申し上げたように、南予の人口状況からすれば、高校自体が今本当に定員ぎりぎりのところが多いんで、各学校に全ての部活動があり、どれでも選択できるのが理想なんだけど、ある程度広域なエリアで考えてやっていくのも1つのありようかなっていう気はしますね。ちょっとその辺は現状のこと聞かないと何とも言えないんで、提案として面白いなと思いましたんで、現場には何か訴えておきます。

（司会）

お時間来てしまっております。2巡目いきたいんですけれども、お一方だけ、どうしてもという方、御意見を賜りますが、いらっしゃいますか。

【知事】

あっ、その前に南宇和高校のサッカー部っていうの今何人ぐらいいる。

（南宇和高校）

34です。

【知事】

じゃあ、まだ歴史は、伝統は受け継がれて活発。何位ぐらい。どれぐらいいったんです、先生。全国制覇。去年は県大会何位ぐらい。

（南宇和高校）

直近の大会でいうと、今年の県総体はベスト8です。

【知事】

おお、やっぱり強豪校としても。

（南宇和高校）

はい、頑張っております。

【知事】

はい、またぜひ再び輝きを待ってます。はい、ごめん。

《補足説明》〔教育委員会〕

県教育委員会では、地域や生徒・保護者の意見を十分踏まえるとともに、指導教員の確保と資質の向上、外部指導者の派遣等により、できる限り運動部活動が存続できるよう努めているところです。

御指摘のとおり、南予地域から他の地域の私立や県立学校の部活動強豪校等に進学するケースがある反面、南予の学校にも、中・東予地域や県外から入学しているケースや地元生徒が中心となってチームを編成し、好成績を収めている学校もあります。

○中・東予地域や県外から生徒を受け入れて好成績を上げている高校

- ・陸上競技 八幡浜(H28 駅伝1位) ・ソフトテニス 川之石(1位)
- ・相撲 津島(1位)、野村(3位) ・ボート 宇和島東(2位)
- ・レスリング 八幡浜工業(1位) ・野球 宇和島東(H28 秋1位)

○地元の生徒を中心に活動し、好成績を上げている高校

- ・陸上競技 宇和島東(H28 駅伝2位) ・女子サッカー 宇和島南中等(1位)
- ・ソフトテニス 宇和島東(2位) ・相撲 南宇和(2位)

※ () 内に順位のみ示しているものは、平成29年度の県総体の順位

また、近年、県中体連、県高体連、県高野連では、複数の学校による合同チームでの大会出場を認めており、単独で出場ができない学校の部活動の活性化に努めているところです。

今後一層、中学校の進学状況等を把握した上で、近隣各校による合同チームの編成がさらに促進されるよう県中体連、県高体連等に働きかけるとともに、引き続き、部活動活性化のため外部指導者の派遣や特色ある学校づくりの支援に取り組みたいと考えております。

13. 地方の病院の医師不足を解消するような県の政策について

地域医療の課題として、医師不足を特に危惧している。私が住む愛南町には南宇和郡内唯一の総合病院である県立南宇和病院があるが、常勤医は定員22名に対し8名(H28.3.1時点)となっており、他の病院の医師の診察、診療支援を受けて病院機能を維持している。また、何とか救急体制を維持しているが、麻酔科の常勤医がいないため、緊急手術には対応できないのが現状である。

そこで、地方の病院の医師不足を解消するような県の政策として、どのようなことを行っているのか、知事のお話を伺いたい。

【知事】

まずはこの地方における医師不足っていうのは、全国的な課題になってます。しかもそんなに古い課題ではなくて、平成16年度ぐらい、今から10年ぐらい前から急速にこれがクローズアップされたんですね。何でそうなったかっていうと、国が制度を変えたから。この制度改正をきっかけに、地方での医師不足が全国で起こりました。どういうことをやったのかっていうと、医師臨床研修制度がありますね。大学を卒業して研修で各病院に行く。昔は臨床研修が必修ではなかったんで、大学病院に残る医師も多く、大学が地域も考えながら分散して人を送っていたのを、臨床研修の必修化により、研修医側の自由選択に変えちゃった。平成16年から。そうすると大きな病院とか東京とか大阪の大都市、そのほうが勉強できるんじゃないかっていう、別にそんなことないんだけど、そういうところにみんな行くようになってしまった。地方の病院には全然来なくなっちゃった。一気にこれが表面化した。でも僕らは知事の立場、当時市長の立場なので、この制度が原因じゃないかっていうんで、制度を元に戻す、もう1回考え直すべきだって言い続けてきたけども、国は一度やったことを変えるっていうのは、失敗したということ認めることに

なるんで、なかなか変えようとしなない。だから、ここを変えない限り、この構造的な問題を解決することはなかなか難しい。そこで、手をこまねいてはいられないんで、地方として何をやったかっていうと、愛媛県の中に愛媛大学医学部があるんで、そことタイアップして、新たな奨学金制度というのをつくりました。

この奨学金制度っていうのは、愛大医学部に地域枠入試で入った場合に奨学金が支給されます。条件があって、卒業した後、医者になった後に、9年間は愛媛県内で勤務をしていただくっていうのを条件にします。9年間、愛媛県に勤務をしていただいたら返還を免除するという制度なんですね。この第1期生がもうすぐ、あと2年ぐらいで出てきます。ここから毎年十何人ずつ、この奨学金制度を活用して、今学んでるお医者さんが、県内に毎年毎年生まれてきて、総勢で、最終的には約190名。約190名が順次ずーっとこれから急速に誕生するようになりますんで、その子たちが今言ったような条件で9年。9年いたらずっというと思うんだけどね、9年愛媛県内でやっていただくことで、お医者さんとして誕生してきますから、この子たちが必ずそういった地域、地域の医療に参加してくれることになるんで、そこまで踏ん張るっていうのが今の県の立場です。だから、あと、第1期生がいつ、2年。平成三十何年だった。

(事務局)

研修には入ってます。

【知事】

研修には入ってる。だから、これから年間十何人だから、一気に出るわけにはいかないけども、それがどんどん積み重なっていくんで、そこで供給体制ができるかなというふうに思ってます。例えば、愛南町だったら、この前準ミスグランプリだった、福岡さん、彼女はお医者さん、外科志望のお医者さんで、準ミスグランプリになって、この前あいさつに来たんだけども、どうするのって聞いたら、準ミスっていうことになったんで、とりあえず東京行きます。東京でいろんな活動をして、長くて3年後には戻ってきて、愛媛県でお医者さんをやります。はっきり言ってくれたんで、やっぱり何だかんだ言っても郷土愛ある、愛媛のドクターXになれって言ったんだけども、そういうふうな郷土愛が根幹にあれば、お医者さんも戻って来てくれるんじゃないかなと期待しています。だから、奨学金制度はもう義務化してますから9年間。だから、そこは確実にお医者さんを供給できるというふうに思ってます。